

まり、これまでブルカを着用することで「宗教的である」とみなされていた女性たちが、ブルカのファッション化に伴って、これまでとは違った方法で評価されるようになってきているということである。

実際、筆者のフィールドワーク中、ブルカを着ていない女性が「装飾の施されたブルカを着ている人は、宗教心からそれを着ているのではなく、そのステータスを見せつけたくて着ている」と言ってきらびやかなブルカを着用している女性を批判しているところを目にした。これは、これまでシンプルなもの为主流であったブルカ自体がファッションとなることによって、ブルカの選択に経済的な格差が反映されるような状況となっていることを示唆している。

その一方で、ブルカを着用した女性は、筆

者に対して「私は自らの宗教心からブルカを着ているのに、ファッションとして着ていると言われてしまうのが嫌だ」と語った。ここでは、ブルカを着用を批判する女性も、それに反発する女性も、ブルカのファッション的側面を意識している点で、認識を共有している。パキスタン各地の都市化が進展し、さらに消費社会が拡大している現状において、ブルカを着ることの意味はどのようなものなのであるのか、そしてそのデザインや着こなしはどのように変化しているのか。このような問題関心に従って、今後の研究を進めていきたい。

引用文献

- 萬宮建策. 2004. 「地域語のエネルギーに見る国民統合と地域・民族運動」黒崎卓・子島進・山根聡編『現代パキスタン分析—民族・国民・国家』岩波書店, 83-119.

キャンディ、エサラ・ペラヘラ祭りのあと

—他者と関係を撚り結ぶ—

清水 加奈子*

スリランカを発つ前日、その日に泊まっていたホテルで電話を受け、日本に帰ることを伝えると「今度はいつ来る？」と聞かれた。相手はキャンディで滞在したホテルの従業員である。キャンディを離れて2週間の間、

何度か電話があり、同じやりとりを3回はしていた。定型句のような「また必ず来いよ」にも嬉しくなり「必ず」と答えた。スリランカで知り合った多くの友人たちが、離れて暮らす家族や友人と頻繁に電話で繋がる姿

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を思い出し、その繋がりの中に自分も入っているのだろうかと思った。

スリランカでは民族、宗教、職業（カースト）等のカテゴリーが、他者を自己とは「関係ない」者だと、その連続性を否定するために日常的に用いられる。自身の研究対象であるタミル人清掃労働者たちの苦境も、雇い主や近隣のシンハラ人にとっては「関係ない」ことであるようにみえる。カテゴリーが存在する中で、他者とどのように繋がることのできるのだろうか。2017 年 8 月のキャンディでの経験を通して、他者と関係を断り結ぶことについて改めて考えた。

キャンディ

キャンディはスリランカの「古都」といわれる。町全体がユネスコの世界文化遺産に登録されており、観光客が絶えず、商業施設も多い賑やかな町ではあるが、どこか落ち着いた雰囲気がある。標高約 500 m のこの地は低地や海沿いに比べ涼しく、なんとなく霽がかかったような景観がそう感じさせるのかもしれない。

また、ここは 1815 年イギリスの全島支配まで、スリランカ最後の王朝が存在していた土地であり、19 世紀末以降、高揚していくシンハラ・ナショナリズムの中で「伝統文化」の地理的表象となった町でもある〔鈴木 2013: 277-278〕。こういった歴史が「古都」というイメージを作り出してきたとはいえる。



写真 1 エサラ・ペラヘラ祭りで仏歯を運ぶ象の行進

地元の見物客の中には仏歯に掌を合わす者もいる。

この町のシンボルは仏歯（釈迦の左の犬歯）を祀った仏歯寺である。仏歯を背負った象の行進がクライマックスであるエサラ・ペラヘラ祭りは、毎年 8 月の新月から満月にかけて行なわれ、世界中から観光客を集める。「ペラヘラ」はパレードの意で、象とダンサーが練り歩く祭りとしてスリランカ各地で行なわれているが、キャンディのペラヘラは規模、知名度ともにスリランカ国内で最大のものである。

以上のように書くと、多数派であるシンハラ仏教徒の町という印象をもたれるかもしれない。しかし実際は、少なくとも中心街は多様な民族が混然と共存している。タミルやムスリム¹⁾の経営する店が立ち並び、仏歯寺からほど近い区画にモスクとヒンドゥー寺院が併存している。私自身が今回の滞在で出会った人々も、タミル人、シンハラ人、マレー人²⁾と民族は多様である。

1) スリランカにおいて「ムスリム」は、しばしば、シンハラ、タミルと並び民族の分類として使われる。

2) スリランカがオランダ植民地期にあった時期を中心に現在の東南アジア地域から移住した人々を祖先にもち、ムスリムである場合が多い。

ホテルの従業員たち

キャンディには8月4日に到着した。ホテルで最初に対応してくれたのは眼鏡をかけた青年で、シンハラ語で話しかけると、「言葉はどこで勉強した?」「スリランカに住んで居るのか?」と、お決まりの質問の後、自分が以前日本語を習ったという話（もっとも現在は少し単語が話せるだけだったが）や、そこに泊まった日本人客の話をしてくれた。彼はこのホテルのマネージャーのTで、ハプタレー³⁾出身のタミル人だった。

ホテルの従業員はTを含め全部で7人。全員が20歳代の青年で、シンハラ人の1人を除くと6人がアップカントリー⁴⁾出身のタミル人だった。それぞれの名前を覚えて挨拶をしている内に話すようになった。ちなみにタミル人同士の会話はタミル語だが、シンハラ人や私とはシンハラ語で話をしていて、他の外国人客と話す際の英語は、学校では習っておらず必要に迫られ修得したという。

従業員は住み込みで働いており、皆とても仲が良い。日中はフロント業務、朝食準備、洗濯、掃除、ベッドメイキングとせわしなく働いているため、昼食は17時頃。テラスで、誰かが買ってきたカレー2~3人前をみんなで囲み食べていた。居合わせれば私にも「一緒に食べよう」と声をかけてくれる。また彼らの手が空いている僅かな時間で、テラスに置いてあるセルフサービスのお茶を飲みなが

ら、お互いの家族の話をしたり、タミル語と日本語の単語を教え合ったりもした。

エサラ・ペラヘラ祭りのあとの夜

さて、今回の滞在は期せずして先述のエサラ・ペラヘラ祭りの開催時期と重なっていた。期間中、歩道には昼間から見物客がひしめき、車道では、食べ物や玩具、歩道に座る際に使うシートを扱う物売りが車を縫って歩き回っていた。ペラヘラの行進は、最終日のディナ・ペラヘラ（日中のパレード）以外は全て夜に行なわれるが、このルートは毎晩変わる。幸運なことに8月6日からディナ・ペラヘラまでの3日間、ホテルの前の道がペラヘラのルートになっていた。このため見物客で混みあったホテルの外に出ずに、予想外のペラヘラ見物を果たすことができた。

エサラ・ペラヘラ祭りの後は、ホテルの客も減り、従業員たちは少し忙しさから解放されたようだった。8月11日の夜、それまでは外に食事に出る暇もなかったマネージャーTが、出入りの修繕工のSと食事に行くという。自分は既に食事は済ませていたが、「行こう」と声をかけられ、断る間もなく連れ出された。

Sは40歳代くらいのマレー人だった。スリランカには0.2%のマレー人が居るが [Department of Census and Statistics-Sri Lanka 2017], 私にとっては初めて出会ったマレー

3) キャンディより100 km 以上南東の中央高地内にある町。

4) キャンディを含む島の中心部に広がる中央高地を指す。キャンディ市郊外から中央高地一帯にかけて紅茶を栽培するエステート（農園兼労働者の居住地）が広がっており、彼ら自身はどうであるか確認していないが、アップカントリーのタミル人の多くは紅茶エステートの出身である。



写真2 エサラ・ペラヘラ祭り期間中のキャンディ
中心街の歩道
昼の時点で既に、場所取りをする人で溢れている。

人であったため好奇心に駆られ、店に行く途中、いろいろなことを聞いた。信仰について聞いた時、彼は無宗教だと答え、こう言った。「宗教は良くない。神が居るなら、なぜ罪もない人々を、ゴミの山を崩して殺す？⁵⁾ そんな神は信じない。」彼はホテルでペラヘラの見物をしていた客や従業員に、数々の「豆知識」を披露してくれた人物でもあった。たとえば、ペラヘラの中で旗を掲揚しているのは、刑期があと僅かである囚人だというようなことである。その情報は一体どこから仕入れたのかと聞いた時には、にこりともせず「インスピレーションだ」と答えたので、真偽のほどは全く不明であったが。

一方、Tは道中から店に着いた後もしばらく、ずっと電話をしていた。Sに「電話の相手はガールフレンドかな？」と聞くと、片目をつむって「ヤールワ⁶⁾だ」と答える。電

話が終わったTに、私がニヤニヤしながら「ヤールワダ？（ガールフレンドか?）」と聞くと「フィアンセだ」と答える。するとSは「フィアンセって英語か?」と聞く。「そうだ」というTの答えを聞いて、たぶんフランス語じゃないかと思いつつも、どちらでもいいことだと紅茶をすすった。大体において、ふたりはタミル語が理解できない私を置いてタミル語で会話をしていたが、時折シンハラ語で説明をしてくれ、疎外感を感じることはなかった。SはTと私の分も支払い、食事に行けなかった他のホテルの従業員のために弁当を買った。

他者と関係を攪り結び

思うに、このキャンディでの一連の出来事には、人間が関係を攪り結び、繋がっていく在り方についての示唆が含まれている。一緒に食事をとり、お茶を飲むという行為の中で、親しみが育つ。物理的に離れたら、特に大きな用事がなくとも電話で繋がることで関係を紡ぎ続ける。そして関係の質や強度が違っていても、どのような二者の間であっても、関係はこのような作法で攪り結び、繋がっていく。

ところで、Tに急に後ろから日本語で「日本人!」と呼びかけられたことがあった。ペラヘラの到着を待っていた時である。覚えている単語を言ってみただけかもしれないが、ムツとした。「名前で呼んでよ。あんたも、

5) 2017年4月14日、ミートタムラの廃棄物集積場（コロombo市の廃棄物を投棄する場所だった）が倒壊し、近隣の住宅100世帯以上が被害を受けた。

6) シンハラ語で「友人」の意。文脈によって恋人を表すこともある。

スリランカ人って呼ばれたらどう思う？」と話すと、不思議そうにしていたがそのうち、「ああ、分かった」と腑に落ちたように笑った。何が分かったのかは分からないが、それ以降は要求したとおり名前と呼ばれた。

私が出会った人々を、タミルだのシンハラだのマレーだのと分類して説明するのと同様に、私も彼らに、恐らく他の日本人客と共に、日本人として分類されていることだろう。それは自然なことだが、個よりも分類が先に来るその呼びかけに寂しさを感じてしまった。確かに、あの日に店でテーブルを囲んだ時にも、自分は日本人であり、Sはマレー人であり、Tはタミル人ではあった。そこにある分類の意味は消え失せてはいなかった。

ただろうが、しかし、それは大したものではなかった。

結ばれる関係に、お互いの分類は無関係ではない。しかし越えられないし越える必要のない区切りが存在している中で、関係し、繋がることはできるということが、他者と関わり続ける希望のように思えた。

引用文献

- 鈴木晋介. 2013. 「キャンディ」 杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』明石書店, 276-280.
- Department of Census and Statistics-Sri Lanka. 2017. <<http://www.statistics.gov.lk/PopHouSat/CPH2011/Pages/Activities/Reports/FinalReport/FinalReport.pdf>> (2017年12月19日)

国境を越えて学ぶ、働く

—タイ、メーソットで出会った移民たち—

木戸 みなみ*

国境の街、メーソット

「タイなのにタイじゃないみたい。」それがタイ北西部に位置するミャンマーとの国境の街、メーソット (Mae Sot) を訪れた感想だった。メーソットへは、タイ第二の都市、チェンマイからバスで6-7時間ほどかかる。道中にいくつかのチェックポイントがあり、

不法に立ち入ろうとする者がいないか、警察が乗客を確認しに来る。私や他の外国人はパスポートを提示し、タイ人は身分証明書を見せているようだった。バスターミナルに到着すると、ホテルまで移動するために乗り合いの小型バスのような車に乗った。私を含め5人の乗客がおり、その全員がタイ人でもミヤ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科